

豪州の印象（2）

加本一久

海のたたずまい

太洋は測り知れない神秘と威力をひそめているようだ。私共は幸い太洋の猛威にも出会すことなく往復したが僅か乍ら海に接したインタビューを書いておき度い。

12月28日神戸港を出る時は冬外套を着こんでても恰度良い様な気温がもう翌日には17.5度と1日1日と気温が昇ってくる。もうこうなると筍の皮を剥ぐように脱ぎ捨ててランニング1枚でゴロゴロすると言った有様である。まさか大みそかや正月に扇風機をかけっ放しで氷水でなきやあ酔い覚めの水にならないとは想像もしていなかったものである。

見渡す限り青い空、青い海と単調さをかこつ頃ともなると時ならぬスコールの見参が繁くなる。水平線の彼方に黒い雲が見え出したと思うや否や忽ちにして船は雨雲のカーテンに包れて仕舞う。そして汗とほこりに汚れた船の行水でもするかのように洗い流していく。

それにしてもスコールは長くはない。雨雲の切れ目にポカリと青空がかいま見えると思うともう雨足は逃げるように去って再び青い海、青い空にケロリと変る。今迄火のついたように泣いてた子供が機嫌が直るともうニコニコしているようなものだ。

赤道は10日目に過ぎた。この頃の日誌を拾ってみよう。

午前中暫くスコール、折角船員達が塗り代えた許りのマストやデッキのペイントが雨だれの為によだれのようなシミが出来て恰度白粉が汗で流れて縞模様の出来た女の顔を想わせる。

運動不足と飽食の為身体がだるい。午前中デッキで仮寝をしてる中10時4分頃赤道を通過したらしい。

赤道と言えれば何かやけつく程の暑さを想像してたら左程でもない。大分身体が暑さに馴れてきた故もあるが案外の凌ぎ易さのようだった。赤道付近はのどかな波のうねりと豊かな光線が海の色に一段と鮮かさを加えて派手な美しさをみせる。うねりと言っても滑らかな起伏と言った方が当る。恰かもヌードの腰から腿に至る線を想わせる肉感的な美しさを形容してもよいだろう。

年中殆んど変化のない気温と豊かな太陽光線のためこの辺は外界気温より海水温度の方が1-2度高いとの事である。

海の深さもこの辺になると2,000尋から3,000尋となる。富士山なんかポッカリ浸って頭が見えそめもしない程の深さである。

ニューアイルランド沖を過ぎニューギニア附近となると所謂「さんごしょう」が多いそうだがこの辺りには幾多の軍艦と無数の人間が藻屑となって消え去っていることだろう。遠からぬ過去の悲惨な闘争を回顧し乍ら何か海の懷に抱かれて眠る英霊に祈り度い気持ちになる。

北太平洋に入り赤道を遠ざかるにつれて涼しくなってくる。長い航海をしていると退屈さに倦きて赤道のような一応の目標を越えてゆくと恰度峠をこして下り坂になったようで気の故か船足も早くなるようだ。

夜空の星も南太平洋から北太平洋に入るとすっかり変って段々と豪州に近づく頃には有名な南十字星も深夜にまたたくようになる。

シドニーに着く

1月14日、天気快晴なれど波は高い。

船が大陸に接岸するにつれて豪州の風景がはっきりする。港外の沿岸は切り立ったような岩石が連

岡山畜産便り 1956.07

っている。日本の青松白砂、或いは青い連山の風景とは余程違う。

初めての外国の港、而も世界の三大美港と言われるシドニーはどんなだろうかともしどかしいやら、珍しいやらで浮き浮きと舷側を離れられない。

パイロットに導れて湾内に入り除々に埠頭に向うにつれて青い樹木に囲れた赤い屋根、真白いビルディングの林立している大都市の景観が展開されていく。遙か彼方に巨大な半円形の弧を描いてポートジャクソン湾をへいげいしている有名なハーバーブリッジが出現してくるともう気もそぞろに陸の土が踏みたくなってくる。船は7時半、ウーローモーロー埠頭に横付けとなった。港内に大小さまざまの外国汽船が横たわり、フェリーボートやヨットも行き交っている。埠頭に近いボタニックガーデン（植物園）にはこんもりとした森、緑の芝生の中に点々として黄や赤い花が咲きこぼれている。

三々伍々と人の歩みが近く、自動車は矢鱈に多い。

然し静かなのんびりした港の風景であってゴミッポイ不潔さも騒々しい雑音もない。反対に船の入港と共にどっと迎える賑やかさも気安さもない。只極めて極めて事務的に最小限度の関係役人が簡単な入港手続きを済ましてソクサと引揚げてゆく丈であった。

僅かに日本の農林省の購買官や商社兼松商店の人達が外国で会う懐しさをこめて迎え入れてくれたことのみが強い印象として未だに臉に浮ぶのみである。

神戸をたつて以来 16 日と 9 時間の長い船旅で 8,210 マイルの波濤を越えてシドニーに上陸する嬉しさも何か白々とした豪州の素気無さに相殺されて引きしまるような、気構えるような気分になった事もあながち私一人ではなかったろう。

海から陸へ、下駄をはき代えて、扱てノソノソとホツキ廻るの記は次号に譲る。

